

AIRsほんとうの話
2012年マイクロレジデンス編



MICRORESIDENCE! 2012

アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点
Artist in Residence, from a Micro Perspective

目次

2 Introduction

3 フィンランド・Ii 市のマイクロ・レジデンス

9 英国ポートランドのマイクロ・レジデンス

14 東京のマイクロ・レジデンス

18 福岡のマイクロ・レジデンス

AIRs ほんとうのはなし 2012 年マイクロレジデンス編

「MICRORESIDENCE!」の準備期間中、最初のアンケートによるマイクロレジデンスのサーチの次の展開として「AIRs のほんとうのはなし」のプログラムにおいて 4 回のトークシリーズを開催しました。「AIRs のほんとうのはなし」は 2005 年に遊工房の 5 年創立記念としてはじめて開催され、また 2011 年の 10 年記念として実施されました。このプログラムでは様々なレジデンスに滞在したアーティストは正直その経験について話しています。2012 年の特集として遊工房のネットワークを通してマイクロレジデンスに滞在したアーティストがそのレジデンスの体験を紹介し、レジデンス環境と設備の妥当性や制作活動にどのような影響を受けたかを振り返りました。この別冊ではそれぞれの参加アーティストのコメントが集められ、またスカイプを通して参加したレジデンスディレクターの意見も載せています。このプログラムを通してより多くのクリエイターなどにマイクロレジデンスの現状と特徴を伝わったと思います。

AIRs: アーティスト・イン・レジデンスのほんとうのはなし

マイクロ・レジデンス特集（その 1）

2012 年・第 1 回： 4 月 15 日（日） 18 時～19 時半



フィンランド・Ii 市のマイクロ・レジデンス：

Art Break Art Break (Kaisa Keratar) x 松本
恭吾



Kulttuuri Kauppila (Mari Maunu) x 丸山芳子

遊工房が行うマイクロレジデンス（小規模、インディペンデント、アーティストランの AIR）に関するリサーチの一部としてマイクロレジデンスでの滞在制作の経験を持つアーティストとスカイプ経由でそのマイクロレジデンスのディレクターとのディスカッションシリーズを新たにスタートしました。第一回目としてアーティストの松本恭吾と丸山芳子とフィンランドの北部の田舎の町「Ii」にあるレジデンスの KulttuuriKauppila と Art Break のディレクターの参加により実施しました。アーティストは自分の滞在制作活動とその経験について、ディレクターはレジデンスの概要・設備などをそれぞれ説明し、マイクロレジデンスの特徴をより深く理解する機会となりました。

I. 松本恭吾の体験談

1. はじめに

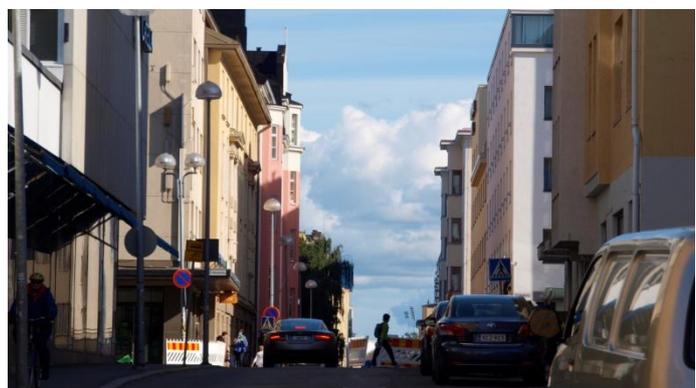
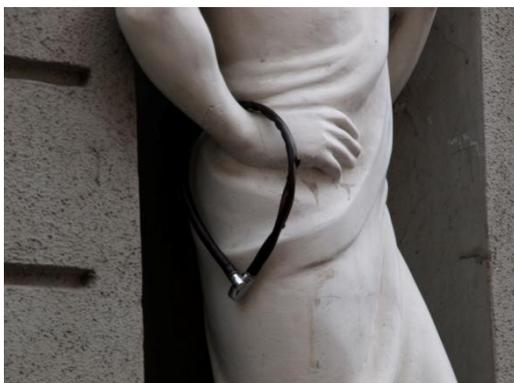
松本は以前からフィンランドに興味を持ち、何回かフィンランドの大規模のレジデンスに申請しましたが、残念ながら通ることができない状況でしたが、遊工房の紹介で art break を知ることができ、フィンランドでの滞在制作が可能になりました。この流れはマイクロレジデンスの重要な役割、またはネットワークを通じた協力の可能性の証だと思えます。特定な国・場所でレジデンスに参加を希望するアーティストにとってマイクロレジデンスは重要な機会を設けます。遊工房は Kaisa と Antti と長年にわたる関係を持ち、彼らが新しく始めたレジデンス事業に松本を推薦しました。遊工房はこのような推薦・情報共有をマイクロレジデンスネットワークを通して育むことができたらいいと思っています。また松本のフィンランドに対する関心は Hamburg のレジデンスと一緒に滞在したフィンランドのアーティストにより深められたもので、一つのレジデンスでの経験が他のレジデンスに滞在するきっかけになるという事にも繋がっています。

2. 滞在制作の概要

プレゼンテーションでは松本はレジデンスのスケジュールを説明しました。2ヶ月の滞在は短すぎるという意見ですが、アーティストによって時間の感覚も制作するために必要としている期間が違うということが分かります。松本の場合はリサーチ、素材を集めること、制作、発表、他のレジデンスをリサーチするなど時間を分け、レジデンス期間を効果的に使い十二分に活動しました。

Art Break でのレジデンスプログラムと相談しつつ、自分で立てた計画です。イイはフィンランドの北部、美しい自然の中の田舎町にありレジデンスでは雑念を取りはらって静かに自分の制作活動に集中できました。

Art Break はいろいろな設備を提供し、素材を集めることから展覧会のコーディネーションまでさまざまな支援をしてくれました。Kaisa、Antti と松本は、朝晩の食事を共にし、親しい人間関係を構築することにもなりました。





3. レジデンスに関するアドバイス

アーティストにとってどのように滞在制作期間を過ごすかという観点で一番重要なのは、レジデンスに参加する前に自分の意思を明確にすることです。それは具体的に何を作るかを決定することではなく、どのように時間を使うか、どのようなアイデアを探求するかを自分の中で明確することです。レジデンスによって提供できることが違うので、自分の制作活動と合うレジデンスを探すことが重要です。レジデンスによって、広いネットワークを共有し、制作活動に集中できる場所を提供、また、サイトスペシフィックな作品を作る機会も設けられるところがあります。またレジデンスによっては、地域交流・地域のアーティストとの交流などを通してその場所をより理解できることもあり、自分の作品を新しい視点から見る機会ともなります。また場合によってアートマーケットとつながる機会もあります。但し、一つのレジデンスで全てを提供することは出来ません。自分にとってどのようなレジデンスが良いかを検討・確認することが必要です。Art Break の場合、制作活動に集中するための時間・空間を提供し、サイトスペシフィックな作品を制作する機会もあり、アーティストのネットワークを共有し、地域とのつながりも強いのが特徴です。

II. Kaisa Keratar による Art Break の概要

Art Break のミッションは、イイの刺激的な環境の中でアーティストの「モビリティ」（移動性）と「国際交流」をサポートすることです。また Art Break を設立のきっかけは、自らも滞在して知った遊工房のレジデンス活動でした。それは個人のアーティスト・コーディネーターが自分のマイクロレジデンスを設立する可能性を示しており、

長年活動してきたレジデンスが新しく設立されたレジデンスにサポート、アドバイスを共有する一つの例となっています。

Art Break のレジデンスプログラムは非常に柔軟で、個人のアーティストのニーズに対応し、大規模レジデンスと異なるマイクロの理念を反映しています。このレジデンスの一番大事にしていることは、プロセスということで、できるだけアーティストの活動プロセスを支援することに努めています。また、マイクロレジデンスを運営することの利点は、自分のスキルを共有すること、地域と世界を繋げる機会の楽しさということです。また人と人を繋げるのも、Art Break の社会的役割と捉えています。

III. 丸山芳子さんの体験談

丸山芳子は、KulttuuriKauppila と遊工房との交流プログラムとして、2010年の夏に一ヶ月間 KulttuuriKauppila に滞在しました。大きなイイ川が傍らをゆったり流れ、森の多い静かな環境です。同じ期間に、KulttuuriKauppila が主催する「アート・イイ・ビエンナーレ」にも招かれ、フィンランドを含む北欧諸国から参加したアーティスト達とのひとときを共有し、また、レクチャーや子供達とのワークショップを通して、地域との交流をはかることができました。

イイはとても小さな田舎町でありながら、KulttuuriKauppila が海外からの刺激を町に持ち込む存在であり、その幅広いネットワークと巧みな広報発信力によって、周辺地域の人ばかりでなく、フィンランド全体のアートシーンと繋がることができます。レジデンスアーティストや展覧会は、制作中の段階から大きく新聞紙面を使って頻繁に紹介され、道行く人も作品の進捗を楽しみ、声をかけていきます。国際交流の活動が地元を受け入れられている様子を感じ取れました。

学校との連携も容易に実現し、好奇心旺盛に丸山との対話を試みる小学生たちには、世界屈指の教育水準国の、のびのび教育の一端をかいま見ることができました。ビエンナーレの準備期間は、各作家に専属のアシ



スタントが付き、技術的な提案や制作協力がとても心強い応援になりました。作品は破損しない間は恒久設置となり、開催の度に作品が増えていくアートの小道が計画されているそうです。

丸山は滞在期間中、KulttuuriKauppila のメンバーや地元の方の温かい歓迎を受け、親しくつきあう中で、自分の気持ちに正直な人生を選びとり、自然環境と密接に暮らす彼らが、精神の充足を最も大切にしていることに共感し、丸山にとって人生の節目とも言える印象深い滞在になりました。



IV. Mari Maunu による KulttuuriKauppila の概要

産休期間中の Leena Lamsa に代わってディレクターを勤める Mari は、初めに KulttuuriKauppila の歴史を紹介。KulttuuriKauppila は 2006 年に誰でも参加できるようなアートスペースとして地元のアーティストグループにより設立されました。レジデンス事業もその一部で、レジデンスを始めてから今日まで、世界中から 20 人のアーティストが滞在しました。毎年ジャンルを問わず 6 人のビジュアル・アーティストをレジデンスプログラムに招待します。アーティストは大体 2-3 ヶ月の滞在の中で制作に必要な時間・空間が取れ、自然の刺激が多い、ゆったりとリラックスした環境において活動できます。レジデンス施設では最新設備を備えた広いスタジオとアパートがあり、KulttuuriKauppila のギャラリーの使用、隣の Oulu 市とも強いネットワークを持つので、Oulu のギャラリーで展覧会を開く機会もあります。

Kulttuurkauppila の特徴の一つは、ワークショップ、セミナー（「master class」レクチャー・シリーズや学校とのコラボレーションのような公開のプログラム）を通して地域への参加を促進することです。子どもから大人まで様々な地域の方と交流し、アーティストとイイの市民との対話や交流を育んできました。このような背景から、地

方自治体は KulttuuriKauppila の協力により国際美術高校の設立を目指しています。Kulttuurikauppila は世界中からきたアーティストが地域の人とスキル、知識を共有し、またフィンランドの習慣・生活を体験する機会となるプラットフォームを提供します。

KulttuuriKauppila はレジデンスアーティストの選択に当っては、アーティストのスキル、実力、動機に重点を置き、又、アーティストが地域に新しいものを届けることが出来るかなどを検討します。アーティストが短期間に未知の環境で何が貢献できるかを知ることは、レジデンスが持つより広い社会的・文化的な存在の理由となります。Mari は、マイクロレジデンス・ネットワーク活動について、このネットワークがそれぞれのメンバーの活動を発展させ、アイデア、経験、アドバイスを共有できるようなプラットフォームとして機能出来たら、アーティストの制作活動に重要な影響を与え、一生に一度の経験になるマイクロレジデンスの役割を可視化することが可能になるとの意志を持っています。



V. まとめ

KulttuuriKauppila と Art Break は同じ小さな田舎町で活動しており、これからも親密に協力すると共に、それぞれのアイデンティティに特徴を出し、AIR がどのような活動に発展するか、独自の道を示していきます。近所の人々が積極的に自らアートプログラムに参加し、アートに対する意識が高まり、海外のアーティストとの交流、展覧会、ワークショップ、シンポジウムに参加し、またより開放的な感覚が共有されたことは、この二つのレジデンスによる地域への貢献が成功していることを示しています。このような現象はマイクロレジデンスの社会的、文化的な役割が人間的な規模で昨日しているということを表しています。



ダイジェストレポート

AIRs: アーティスト・イン・レジデンスのほんとうのはなし

マイクロ・レジデンス特集 (その2)

2012 年・第2回：5 月20 日 (日) 18 時～19 時半

英国ポートランドのマイクロ・レジデンス:

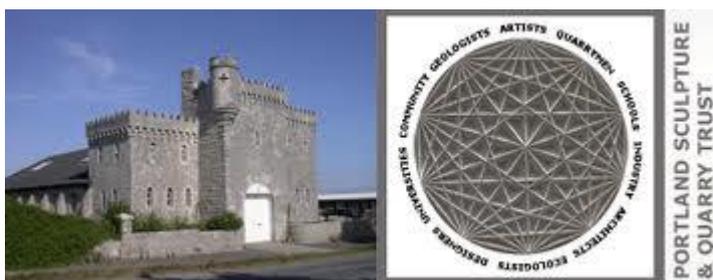
はじめに

PSQT は英国のかつての石切り場として繁栄し、ポートランド島は 100 万年前の化石と先史の岩が連立する先史歴史の上に存続しています。島の石は、19 世紀以降英国を象徴する数々の建物に使用され、英国の代表的な石切り場となりました。30 年前、美しい自然と価値ある地誌をもって、創造活動と教育現場の創出を目的に PSQT は設立されました。

PSQT のプロジェクトは、現在のディレクターであるハナ・ソファーさんが国際シンポジウムを島で催した後に設立されました。芸術、地理学、建築、環境、地元のコミュニティーを結ぶアイデアのもと、PSQT は活動し、多様な施設と学際的なアプローチは国際的な評価を得るに至っています。

ロンドンオリンピックの関連プログラムとして、文化オリンピックが開催された本年、PSQT は島の豊かな文化財に焦点を当てたシリーズで展示やイベントを主催しました。相原正美と石井隆浩は遊工房の推薦を受け、4-5 月にか約 1 カ月半のレジデンスと展示を行いました。

今回の「ほんとの話」の最後に、代表のハナとポールは、アーティスト同士が活動するための知識や情報を共有できる繋がりが持つことについての、将来的な可能性について語りました。この繋がりは、観客の拡大や、地域文化再生における芸術の役割、文化的風景、社会とアーティストとの関係の再構築など、諸問題について取り組む場にもなり得ると考えています。また、「風景を問う」というテーマでのコラボレーションプロジェクトを介し、日本とイギリスのアーティストが集い、様々な文化背景を共有することを提案しました。



I. 相原正美の体験

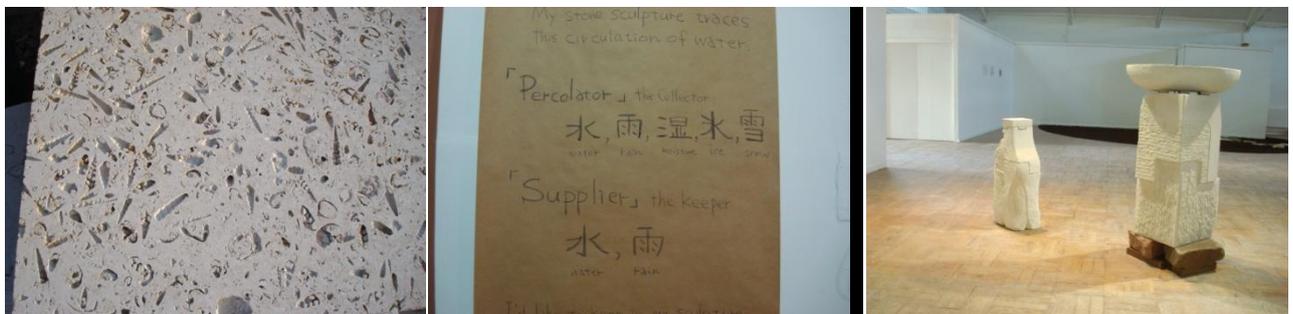
相原は石や木を使った彫刻を中心に長年活躍を続ける彫刻家で、近年北海道を活動の拠点にしています。PSQT で滞在制作を遂行するのはまさに最適の環境であり、また、到着後すぐに PSQT が最も価値を置いている島の歴史や自然に相原も感銘を受け、そして、→削除 PSQT が島のコミュニティに深く根付いていることに気づきました。



滞在中、相原は自らの手で選んだポルトランドストーン（ライムストーン＝石灰石）を、PSQT が備えている手彫りの道具や工業的なコンプレッサーも使いながら、彫刻作品を制作しました。雨風が厳しい季節に滞在した相原にとって、日々、PSQT のスタッフの温かいサポートに励まされました。



有名なポルトランド・ストーンで制作できる好機に、相原は初心に戻って石材と向き合うことを決め、普段なら強すぎる「自然」をあまり取り込まない作業をするところですが、原石の自然のままの表面のテクスチャーを生かし、そこへ注意深く先史に水が通っていた痕跡を彫り残しました。



地元アーティストに出会うことは少なかったのですが、ポルトランドは、英国全土そして世界からアーティストが集まるセンターとして、創造的な交換と数多の出逢いの場を提供していますから、アーティストだけでなく、石彫を学びに定期的にも人々が、様々な短期ステイのコースから成る教育プログラムに参加するために島を訪れます。交流と豊かな情報交換を奨励する環境の中で、様々なアーティスト、ランドスケープアーキテクト、地誌学者、そして石を愛する人々が同じ施設を共有し、隣合わせで仕事をすることができます。



石と素材に制作する作家が抱える難題は恐らく搬送で、創り終えたらどうやって削除持ち帰れば良いでしょうか？これは、海外から訪れるアーティストにとって特に重要です。作家は作品を寄付する場合がありますが、PSQT は積極的にスポンサーや作品販売の機会を探しています。

本土からやや離れた場所とはいえ、公共機関が整備されアクセスが良い PSQT は、歴史的に価値ある自然豊かな場所に身を置きながら、石を近くに感じつつ、制作したいと願う人々にとって、最適なレジデンスと言えます。

II 石井隆浩の体験

1. はじめに

石井はポートランドでのレジデンスに参加することにより、従来ほとんど扱うことのなかった石を扱うことになりました。その際、石を彫るというアプローチを取らず、日本庭園での石の使い方に結びつけ、「積む」「敷く」「組む」をキーワードに作品を作りました。環境を通して扱う素材が変わる、またその素材を通して自国の文化を掘り下げる、といった普段と異なる環境との出会いはレジデンスの持つ代表的な意義の一つではないでしょうか。



更に石井はレジデンスでの展覧会終了後も継続してレジデンスに滞在することを希望し、ポートランドを拠点にイングランド南部を東へ西へ、リサーチ旅行に出かけます。そこでのリサーチが今回の展示へと結びつきます。

2. 滞在制作の概要

滞在制作では石井はイングランドと日本の主に庭での石の使い方の違いに着目し、リサーチを開始します。リサーチ方法は日本から持参した書籍の内容と現地の図書館や書店を利用して入手した書籍の内容の比較、関連するウェブサイトからの情報収集の他、ポートランドや近郊都市への撮影旅行、集めた資料を基にしたドローイング、情報整理・発信の為にウェブサイト（ブログ）の作成などでした。その中で「積む」「敷く」「組む」といった単純な動作がその文化的背景の違いによって違う表象に結びつく、という仮説を裏付けていきます。



展示では石井は従来同様、日本庭園を基にしたインスタレーションを行いつつも、リサーチ結果を基に石を取り巻くイングランドと日本の文化的な違いを組み込みます。それと同時に「レジデンスは、他国の文化を学び吸収する機会としてだけでなく、自国の文化を紹介する機会にも使える」と考え、その考えに基づき、Japanese Gardenとひとくりにされてしまう日本庭園を大きく「浄土式庭園（Paradise Garden）」「枯山水（Zen Garden）」「露地（Tee Garden）」と分け説明し、展示を通して日本庭園の持つバリエーションを紹介します。

レジデンスでの展覧会開催後、石井は以後の作品制作のリサーチのため、イングランド南部の東西にある世界遺産や植物園、庭園、フラワーショーを訪れ資料の収集や思索を行います。



また、レジデンス滞在終了後も石井は引き続きドイツ、オランダへと個人的に滞在し、各地の植物園や庭園、フラワーショーのリサーチを続けます。

主なリサーチ先：

- RHS Chelsea Flower show 2012 (London / England)
- Royal Botanic Gardens Kew (London / England)
- Garden Museum (London / England)
- Georgian Garden (Bath / England)
- Barbara Hepworth Sculpture Garden (St Ives / England)
- Bennetts Water Gardens (Weymouth / England)
- Abbotsbury Subtropical Gardens (near Weymouth / England)
- Sissinghurst (near Cranbrook / England)
- Floriade (Venlo / Holland)
- Botanisches Museum Berlin (Berlin / Germany)
- Gärten der Welt (Berlin / Germany)

3. レジデンスに関するアドバイス

「2010年から2011年にかけて1年間レジデンスではなく個人でドイツに滞在していました。

そこでの体験と今回のレジデンスを利用したイングランド滞在を比較して考えると、レジデンスではあらゆるサポートを受けられる、という点が大きな魅力だと思います。

もちろん得られるサポートは個々のレジデンスにより異なるかと思いますが、基本的には生活環境、制作・展示環境、人との出会いをサポートしてもらえるかだと思います。

自分の滞在目的を明確にした上で、事前にどのレジデンスがどのようなサポート、プログラムを用意しているのか、どのようなアーティストを希望しているのか等情報収集し、滞在目的と合致したレジデンスを選ぶことがレジデンス滞在を有意義にする上で重要ではないでしょうか。

一方、個人で外国に滞在する場合は全て自分でマネジメントすることになります。試行錯誤しながら生活環境、制作・展示環境、人との出会いを獲得して行くのは大変ですが、その活動を通して得られる体験も豊富です。事前に具体的な滞在目的がなく漠然と環境の変化を求める場合はその試行錯誤の体験を通して様々な可能性を得られるかと思います。

またレジデンスを含め外国で生活をする場合、上記のように経験を得ることに焦点が行きがちですが、自国の文化を外国に紹介することにも意識的であって欲しいと思います。難しいですが何を与えに外国に行くのか、ということも一度じっくり考えてみるとよいかと思います。」

AIRs: アーティスト・イン・レジデンスのほんとうのはなし

マイクロ・レジデンス特集（その3）

2012年・第3回： 6月3日（日）17時半～19時半

東京のマイクロ・レジデンス：

Youkobo Art Space x サラン・ユコンディ（タイ）

タイデザイナーのサラン・ユコンディは国際交流基金の「JENESYS」プログラムによって2012年4・5月の2ヶ月遊工房アートスペースに滞在しました。滞在期間中、春のトロールの森として隣の桃井第四小学校の子どもたちとワークショップを開催し、その成果になる作品を善福寺公園で展示しました。また個人制作も行い、東京という環境に応じた展覧会も開催しました。サランは都市でのレジデンスだけではなく、田舎のレジデンスにも興味を示したので、遊工房は、同様のマイクロレジデンス-福岡県糸島市にあるStudio Kuraと協力して、サランが遊工房での2ヶ月の滞在後に全く違う環境にあるStudio Kuraで1ヶ月のレジデンスを行えるようにしました。サランにとって、別の視点から日本の風景や文化を見る機会になったでしょう。

6月3日、Studio Kuraで滞在していたサランは、スカイプを介して遊工房のスタッフと遊工房での滞在について振り返りました。サランの経験を聞く前に、遊工房の村田達彦は遊工房の活動とマイクロレジデンスのリサーチを紹介しました。



遊工房アートスペースは10年以上東京・杉並区の善福寺公園の近くで、国内外のアーティストのためにギャラリー、スタジオ、そしてレジデンスを提供してきました。その前でもこの建物は長い期間アートのための場所として村田弘子の彫刻スタジオ、またはアートスクールや展示空間として使われました。村田夫妻の海外での経験と海外のアーティストが遊工房で滞在制作プログラムに参加したいという希望を示した結果として、アーティスト・イン・レジデンス事業も始まりました。ここでは国際的なクリエイティブな活動が出会う場所になりました。アーティストの制作活動を促すこと、社会においてアーティストへの理解を高めることを目標として2001年に正式にレジデンスが設立されました。

遊工房の設備に関してはギャラリー、ラウンジ、オフィス、二つのスタジオ、二つの宿泊アパートがあります。レジデンスアーティストは1ヶ月～6ヶ月まで滞在しています。レジデンス事業と同時に日本在住のアーティストを中心

としてギャラリープログラムも運営し、レジデンスアーティストとギャラリーアーティストとの交流も育んでいます。3.11 の震災の後、建物自体の補強することが必要となったのを機に1階の空間をリフォームし、よりコンテンポラリーなデザインのギャラリーとラウンジができました。

いくつかのプログラムを開催する多様な機能を持つアートスペースとして、様々なアーティスト・クリエイターたちとの交流を大事にしているため、トークイベント、展覧会、ワークショップ、地域への参加など様々な交流機会を提供しています。コミュニティでの活動として2011年まで毎年の秋に「トロールの森」という野外展を善福寺公園で開催し、現在も毎月小学校で「アートキッズ」というアート教育プログラムも展開しています。また、毎年「の春のトロールの森」において遊工房のアーティストが学校でワークショップを開催して小学生の作品を公園で展示しており、今年はサランがこのワークショップのリーダーになりました。



地域のコミュニティに根差したレジデンスと共に国際的なプラットフォームと結びついたレジデンスであり、スペースや資源としては小規模のレジデンスであるにも関わらず、グローバルなスケールで動いている訳です。海外のレジデンスとの協力プログラムなどの様々な例があり、その中で特にイスタンブールとの強い関係を持っています。また Res Artis のメンバーとして、J-AIR という日本のレジデンスネットワークへの参加を通して、積極的に国内外のレジデンスとのネットワークに貢献しています。

このような国際的な活動を通して、アート機関とは異なる、遊工房と同様の小規模でアーティスト中心のレジデンスモデルの存在に気づき、このようなレジデンスに「マイクロレジデンス」という名前を付けてきました。マイクロレジデンスの重要な役割や多様な存在に対する意識が高くなり、マイクロレジデンスの一つ一つに結びつけ、遊工房と Studio Kura の共同レジデンスのような協力機会を促進するために遊工房はマイクロレジデンスをリサーチし始めました。このリサーチを通して世界中から 30 軒のマイクロレジデンスが何らかの形で協力関係を築くことに興味を示してくれました。遊工房はこのような活動によってアーティストの活動にフィードバックができ、社会の中での重要な役割への理解を高めることを期待しています。

この第一歩として遊工房は 2011 年 12 月に Studio Kura の松崎宏史、シンガポールの INSTINC の Shi Yung Yeo、そしてスカイプを介してベトナムの Nha San Studio のリン・グエンと、最初のマイクロレジデンスミーティングを開催し、マイクロレジデンスのネットワークの可能性やこの後の協力機会についていろいろ検討しました。特に、INSTINC と Studio Kura とのコラボレーションや今回の遊工房と Studio Kura とのコラボレーションのような協力関係を、一つ一つのレジデンスの繋がりで育むことができるかということを議論しました。

Saran Youkongdee サラン・ユコンディ

サランにとっては東京での滞在では様々な初めての経験がありました。初めてレジデンス滞在、初めて個展を開催、初めて子どもとの活動、それぞれの体験が刺激になりました。特に「春のトロールの森」での隣の小学校とのコラボレーションが印象的でした。「わたしの中の木」というタイトルで桃井第四小学校の生徒が廃材の木材を使い、素材を再利用し、様々なカラフルなデザインが施された「木」が、善福寺公園で展示されました。



レジデンスに参加する前、サランは作品の計画がありましたが、来てから新しい環境に感じる必要と感じた結果プロジェクトが変化し、バンコクと東京との相違点と共通点に焦点を当てる作品を制作しました。紙鋸工房も見学して紙の新たな作り方を学び、レジデンス最後に行ったインスタレーションでは、数百枚の短冊がつながった立体スクリーンに東京のイメージをプロジェクターで映しました。お客さんは短冊に都市での感覚についてメッセージを書き、インスタレーションに追加しました。この小さな行為で参加するのが魅力的で 70 人くらいが参加してくれました。新しい環境との出会いと、天井が高く広いスタジオで制作することによってこの作品ができました。



サランの滞在紹介後以下の質疑応答がありました。

遊工房で滞在制作活動を行うことを選んだ理由は何ですか？

レジデンスに参加する前サランは国際交流基金に大都市と田舎町との間のレジデンスを体験するという希望を示しました。遊工房は東京の中でも、都心ではない場所にあるレジデンスとして紹介され、ここで少し違う環境の中で活動できると期待されました。

東京のアーティストとどのような交流ができましたか？

サランは今までデザイナーとしてタイのデザインシーンの中で活動してきたので、遊工房での滞在では色々なアー

ティストと出会い、デザイナーの実際的な考え方よりアーティストの概念的、美学的なアプローチへの理解が高まりました。

今回は初めてレジデンスに参加することになりましたが、この体験は今後の制作活動にどの影響を与えると思われるですか？

このマイクロレジデンス滞在を通して様々な体験や刺激と出会い、これからタイアーティスト・デザイナーと日本との関係を深まる方法を考えたいと述べました。

遊工房は何か改善できるところありますか？

サランは遊工房の設備とスタッフを高く評価してくれました。特に東京のアートシーンへ彼を紹介してくれました。

バンコクで自分のアートスペースをつくる予定があるという話を聞きました。。。

サランはこれから古い工場でアーティストとデザイナーが集まり、アイデアを共有して実現できる場所としてのシェアスタジオを設立する予定です。またその中で海外アーティストがこの交流に参加できるようにレジデンスプログラムを提供することも考えています。遊工房での滞在からもいろいろなヒントをもらいました。

遊工房はマイクロレジデンスとして自らの活動を認識し、ほかのマイクロレジデンスと結びつこうとしています。アーティストとしてマイクロレジデンスに滞在することによってマイクロレジデンスの強みはどこにあるか、また大規模のレジデンスができないところは何かと思いますか？

サランの反応として「でも小さいと思わないですよ」と言ってくれました。スペース的に小さいですが、繋がりとしては大きなネットワークを持っているので大規模のレジデンスとして捉えられます。

最後に Studio Kura の松崎が村田達彦に質問したのですが、マイクロレジデンスの国際ネットワークをいろいろ検討していますが、その目的はなんですかと聞きました。村田は正直にこの後の方向性について松崎さんの希望も聞きたいと言いました。一つの提案としては大規模の協力関係を作ろうとしたらマイクロレジデンスの世界大会を開いても良いということです。しかし大人数であることは問題ではなく、個人と個人とのフェースツフェース交流が重要なので、数百人でも 2~4 人でもかまいません。

AIRs: アーティスト・イン・レジデンスのほんとうのはなし

マイクロ・レジデンス特集 (その4)

2012年・第4回: 6月18日(日) 17時~18時半

福岡のマイクロ・レジデンス: StudioKura x Saran Youkongdee

はじめに

Studio Kura は 2007 年に松崎宏史によって設立されました。ヨーロッパでアーティストとして活動し、海外アーティストのネットワークを持つ松崎はアーティスト・イン・レジデンスの活動に詳しく、帰国後日本では大都市圏以外ではレジデンスが少ないと感じ、福岡県の糸島市という田舎町でレジデンスを始めました。Studio Kura は、福岡市部から電車で 45 分という好立地にあり、藤浩志など地元のアーティストも多く、滞在アーティストは多様なレベルで地域に触れることができます。また伝統的な蔵を使ったスタジオとギャラリーの前には田園が広がり、山が聳えます。

創立してから今日までの 5 年間に、12 カ国から 21 名ものアーティストが滞在しました。Studio Kura の特徴は自然や地場農業コミュニティとの強い結び付きにあり、積極的に日本の伝統技術や地域の職人を滞在アーティストと交流させています。

田舎町で展開する Studio Kura のビジョンは極めて国際的です。シンガポールの INSTINC や遊工房との共同レジデンスプログラムや、秋吉台芸術村や 3331 Arts Chiyoda と滞在アーティストの推薦を交換し合うなど、国内外のレジデンスと積極的に協働しています。また 2012 年にはレジデンス周辺の田園を舞台に糸島芸農というアートフェスティバルを立ち上げ、アーティストと地域の方とを結びつけた展覧会やワークショップを開催しました。

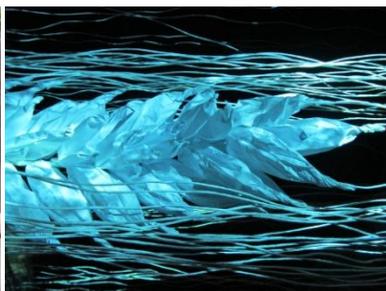
サラン・ユコンディの体験

タイのサラン・ユコンディは一ヶ月間 Studio Kura で滞在制作を行い、展覧会とワークショップを行いました。サランは、Studio Kura の滞在中、直前に 2 ヶ月滞在した東京という都市部と、糸島という地の大きな環境の相違に直面しました。都市生活者であるサランにとって交通の不便な場所に滞在することに最初、戸惑いがありましたが、Studio Kura を取り巻く里山の美しさ、また自然と共存しながら連綿と続く糸島の文化への興味から、この糸島のユニークな環境、歴史への応答となる作品制作を試みることができました。



サランは、東京の遊工房での滞在制作ではタイと日本をつなぐ作品を試みましたが、Studio Kura ではこの関係性を直接的に強調するのではなく、両国の共通点を取り組み、特に食べ物、米やその他の穀物をテーマとした制作活動を追求しました。その成果として、地域で育つ穀物をモチーフにした白い和紙をつかった彫刻作品を発表しました。この作品の中で日本のミニマリズム、または糸島での長い伝統、人生に感じる時間性と物語性も表現されました。

作品のリサーチのために山口県の八女の和紙工房を訪ねました。昔この地域では百を超える和紙工房がありましたが、現在では残念ながら1件しか残っていません。次世代への伝統工芸技術の継承問題は、タイでも同様に懸念されています。糸島地域の歴史と伝統に興味を抱いたサランは、日本史の教師でもある松崎の父親より学びました。また「糸島芸農」でサランが実施したワークショップでは、参加者が地域の商品のために紙素材のオリジナル包装をデザインし、サランの地域への関心がさらに表現されました。地域の伝統文化だけではなく、地域のアートシーンにも積極的にに関わり、福岡アジア美術館のレジデンスアーティストとも交流し、毎週地域のアーティストの集まりに参加しました。



遊工房アートスペースと Studio Kura との比較

遊工房での滞在と Studio Kura での滞在を比較したサランは特に環境との違いを取り上げ、四月の東京の美しい桜、6月の糸島芸農を体験することができ、両方ともとても良いタイミングだったと振り返りました。Studio Kura に行く前には、遊工房で展開したプロジェクトを続ける予定でしたが、現地での様々な出会いによって新しい作品を作るインスピレーションが生まれ、最初の戸惑いは薄れ、違う環境を楽しむ体験となり、その自然と静寂からさまざまな刺激を受けました。

二つのマイクロレジデンスの滞在で見たマイクロレジデンスの特徴・可能性は何かという問いに対し、サランは「絆 (connection)」と答えました。サランは創造活動の中で、常に人と人との結びつきを意識しているため、Studio Kura と遊工房の活動を高く評価しています。アーティストとの深い関係作りや、アーティストを地域とアートシーンへ促すことを大切にしている点などが挙げられます。

両方のレジデンスで、近隣の職人の工房を体験したり、地域での創作活動についての洞察を得るなど、相互にとって刺激となりました。サランは国際交流や技術交流に関心を持ち、今後タイと日本との創造的な交流を促進するために、スカイプでのディスカッション、またはフェイス・ツ・フェイスの交流の可能性を検討したいと言いました。またこの二つのとても貴重な経験を機会に、帰国後、タイで伝統的な紙工房の協力を得て自らレジデンスプログラムを運営することを考えています。



将来の目標

このレジデンスを通してサランは様々な経験を得て、様々なインスピレーションを受けました。日本のデザインやスタイルを身近に体験し、自分の作品の中に生かした成果を、国際的なプラットフォームで発表することを目指しています。

ディスカッションの中で Studio Kura の松崎は個人でアーティスト・イン・レジデンスを設立することが資本主義のモデル以外のクリエイティブ活動であると述べ、今後のビジョン、目標は何かという質問に対して、松崎は、長期間継続的に活動を続けること自体が目標であると説明し、助成金に依存しないようなモデルを追求しています。このような背景の中、大きな組織や機関以外のレジデンスの相互援助を促進できるマイクロレジデンスネットワークの重要性が見えてくるのか。まだ、ネットワークの形態と目標が曖昧だというコメントもあり、これに対して村田達彦は、自然な展開を期待していると述べました。



マイクロレジデンスのグループが出来たら直面する問題を共有し、協力しながらその問題を取り組むことがグループの機能の一つになるでしょう。例えば Studio Kura が現在小規模の予算なのにスタッフの人数が必要という問題を直面しています。その他の機能としては機会を共有すること、新しい展開を求めることが重要でしょう。Studio Kura も積極的にその可能性を追い、現在シンガポールの美術大学と協力して「Studio Kura Award」としてデザイン学生に短期間滞在に参加する機会を設けています。また今回の遊工房と Studio Kura との共同プログラムもマイクロレジデンスとの協力可能性の良い例の一つになるでしょう。

本印刷物は Web にて公開しています。 www.youkobo.co.jp/microresidence
また、関連の詳細記録も併せて参照頂きたい

- 本冊 MICRORESIDENCE! 2012
- 別冊1 — マイクロアーカイブ - 31 軒のマイクロレジデンスの紹介
- 別冊2 — マイクロ・ディレクターズ・トーク・2012 年 10 月 30 日の記録
- 別冊3 — AIRs ほんとうの話 2012 年マイクロレジデンス編
- 別冊4 「小さなアートの複合施設から大きな可能性を！」
— マイクロレジデンスの調査研究（中間報告） 2012 年 6 月発行

This document is also available online www.youkobo.co.jp/microresidence
This is also accompanied by supplementary materials providing further detail on microresidencies

- Main booklet MICRORESIDENCE! 2012
- Supplement 1 — Micro Archive – An introduction to 31 Microresidencies
- Supplement 2 — Micro Directors Talk Document – 30th October 2012
- Supplement 3 — Open Talk about AIRs Microresidence Series 2012
- Supplement 4 The Macro Possibilities of a Micro Art Space
— An Interim Report on Microresidence Research published June 2012

MICRORESIDENCE! 2012

アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点
Artist in Residence, from a Micro Perspective

協力 ResArtis、TransArtists、Trans Cultural Exchange
東京ワンダーサイト、J-AIR ネットワークフォーラム、
AIR-J（国際交流基金）
寄稿 日沼禎子・女子美術大学
助成 文化庁・文化芸術の海外発信拠点形成事業
EU・ジャパンフェスト日本委員会
発行者 遊工房アートスペース www.youkobo.co.jp
編集責任者 村田達彦
編集 村田弘子、金井詩子、太田エマ、椛田有理
翻訳 鈴木慶子、金井詩子、太田エマ、ジェイミー・ハンフリーズ
写真撮影 柳場大
デザイン 前田龍一

発行 2013 年 2 月
〒167-0041 東京都杉並区善福寺 3-2-10 遊工房アートスペース
Tel 03-5930-5009 FAX 03-3399-7549 e-mail info@youkobo.co.jp

Cooperation ResArtis、Trans Artists、Trans Cultural Exchange
Tokyo Wondersite, J-AIR Network Forum,
AIR-J (Japan Foundation)
Contributor Teiko Hinuma, Joshibi University of Art & Design
Support The Agency of Cultural Affairs, Japan
EU-Japan Fest! Organizing Committee
Publisher Youkobo Art Space www.youkobo.co.jp
Editing in Chief Tatsuhiko Murata
Editing Hiroko Murata, Utako Kanai, Emma Ota, Yuuri Kabata
Translation Keiko Suzuki, Utako Kanai, Emma Ota, Jaime Humphreys
Photo Masaru Yanagiba
Design Ryuichi Maeda

Published February 2013
〒167-0041 Tokyo Sugnumi-ku Zempukuji 3-2-10 Youkobo Art Space
Tel 03-5930-5009 FAX 03-3399-7549 e-mail info@youkobo.co.jp

